二〇一五年度

H国語問題

注意

一　試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
二　解答用紙はすべて**HBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシル**で記入することになっています。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
（万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。）
三　この問題冊子は**20ページ**までとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は**一～三**となっています。
四　解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に**氏名**のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
五　解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
六　解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
七　この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

一　マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
二　一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
三　訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
○1 ○2 ●3 ○4 ○5

（3と解答する場合）

一　左の文章を読んで後の設問に答えよ。（**解答**はすべて**解答用紙**に書くこと）

面白いことに、音楽家たちが日常的な音楽の現場で用いる言葉は、少なくとも私の知る限り、総じて砕けて(1)いて端的であり、感覚的で生々しい。観念的な表現――例えば一昔前のクラシック批評でしばしば見かけた「精神性」とか「宗教的」といった――を、当の音楽家たちはまず使わない。それどころか彼らは、身体的実感が伴わない物言いを、何より軽蔑する。「音楽家を納得させる語彙」の第一条件は、形而上学的でないこと、つまり身体的であることだという印象がある。

この意味で興味深いのが、リハーサルで指揮者たちが使っている言葉の性質である。彼らが練習で用いる語彙は、明確にいくつかのカテゴリーに分類することが出来る。一つは「もっと大きく」とか「ここからクレッシェンドして」といった直接的指示。二つめは「ワイン・グラスで乾杯する様子を思い描いて」といった詩的絵画的な比喩。そして三つめが、音楽の内部関連ならびに外部関連についての説明。内部関連とは「ここはハ長調だ」とか「再現部はここから始まる」といった音楽構造に関するもの。外部関連とは作品の歴史的文化的な背景についての説明などである。どれも「音楽を語る言葉」としてポピュラーなものだ。だが私が何より注意を促したいのは四つめの語彙、つまり身体感覚に関わる彼らの独特の比喩の使い方である。

リハーサル映像などを見ていて気づくのは、彼らが時として（あるいは頻繁に）、それを耳にした途端こちらの身体の奥に特定の感覚が湧き上がってくるような、一風変わった喩えを口にすることである。いわく「四〇度くらいの熱で、ヴィブラートを思い切りかけて」、「いきなり握手するのではなく、まず相手の産毛に触れてから肌に到達する感じで」等々。それまで単なる抽象的な音構造としか見えなかったものが、これらの言葉がそこに重ねられるやいなや突如として受肉される。体温を帯びた生身の肉体の生きた身振りとなるのである。

また一見絵画的と見える比喩でも、指揮者の使う言葉はしばしば鮮烈な身体イメージを伴う。例えばスメタナ《モルダウ》のリハーサルでフリッチャイ(注1)は、「狩りの音楽」について「ここではもっと喜びを爆発させて、ただ

し狩人ではなく猟犬の歓喜を」という指示をしている。ここで意図されているのは、静止した詩的な絵画イメージなどではなく、もっと生々しい(イ)リンジョウ感――制止もきかずはね回り、主人に抱きつこうとする犬たちの、四方八方にこだまする吠え声、小刻みに震える尻尾など――だろう。

音楽が喚起するこうした身体／運動感覚について、ハンスリック(注2)が次のようなことを言っている。「音楽はいかなる感情も、いかなる情景も、絶対に表現することは出来ない」という文脈での発言である。まず感情について彼は、音楽は感情の運動的な側面（つまり感情内容ではない事象）を模倣するだけだという（『音楽美論』）。

「［音楽は］感情に関して何を表現できるのであろうか。ただ感情の動的なものだけである。音楽は物的な過程の運動を、早いとか遅いとか強いとか弱いとか、上昇的とか下降的にとかのそれぞれのモメント(注3)に従い模倣（もほう）することができる。［中略］［ただし］音楽は実際には感情自体を現わすこともできない」。

次に情景についても、彼は同じ主張をする。音楽は特定の情景を、それと同種の運動感覚を通して連想させることが出来るだけだというのである。

とかくハンスリックは「音楽は音楽であって、その外のものを表現したりはしない」と主張したがる。つまり音楽は言葉のような直接の指示機能は持っていない、単に同種の感覚を特定の音の運動を通してかきたてるだけだという否定的な文脈で、これらの発言はなされたものなのだ。(3)だがハンスリックはこれらの記述において、まさに彼が躍起になって否定しようとしていたこと（＝音楽は何かを表現する）を、極めて雄弁に肯定しているように思える。つまり運動感覚を通して音楽は、ありとあらゆるものを極めて生々しく喚起するとも言えるのだ。

少々理屈っぽくなるが、例えば右の例でいえば、(4)確かに「スメタナの音楽は（狩人ではなく）猟犬の歓喜を表現している」のではない。むしろ逆に、音楽の中に本来内在している強烈な運動感覚が、「猟犬の歓び」という言葉を与えられることで、まざまざと私たちの身体に喚起されてくるのである。フリッチャイはこの箇所の前後で、四本のホルンがひとかたまりになって溶け合うことなく、それぞれが独立して四方から呼びかわし、こだまするような効果を再三求めている。おそらく「猟犬」という比喩も、こうした声部の独立性を詩的に表現したもので

あろう（ところかまわず跳ね回る犬たちは、兵隊のように行儀よく整列して行進などしないわけだから）。ここでは、音楽が猟犬を表現しているのではなく、「猟犬」という言葉が音楽構造の比喩――それも極めて鮮烈な――として機能しているわけである。

『「わざ」から知る』という本の中で生田久美子[注4]は、特定の身体感覚を呼び覚ますことを目的とした特殊な比喩を、「わざ言語」と呼んでいる。彼女が例として挙げるのは主として日本舞踊である。その伝承においては、「指先に全神経を集中させて」とか「手をもっと上にあげて」といった、誤解の余地のない一義的な指示はあまり使われない。代わりに師匠たちは、「指先を目玉にしたら」とか「天から舞い降りる雪を受けるように」といった、一見トッピョウシ[ロ]もなく、あるいは曖昧な表現を使うのを好む。しかし彼らは、もっと明瞭に説明出来るものを、もったいぶってわざと遠回しな表現をしているわけではない。「手を右上四五度の角度に上げる」といった表現はそれなりに正確かもしれないが、それでは単なる身体部位の一パーツの表面的な「形」の［　　］に終わってしまう。手を四五度上げればそれでいいというわけではない。むしろ一つの動作の細部ではなく、どういう身体全体の構えと感覚――生田はそれを「形」に対比させて「型」と呼ぶ――でもってそれを行なうかが、とても重要なのだ。こうした動作の根源にある「型」の感覚を喚起するのが、わざ言語だというのである。

私なりに言い換えるなら「わざ言語」とは、身体の共振を作り出す言葉である。それまでばらばらだった自分の気分（感情）／動作／身体感覚の間の関係。あるいは自分と他者との間の身体波長のようなものの関係。それが、一つの言葉を与えられた途端、生き生きと共鳴し始める。そういう作用を持つのが、わざ言語ではないか。ただ単に手を一定の角度だけ上げることが問題なのではない。何も考えず、感じず、ひたすら外面的な動作を正確に真似すればいいのではない。重要なのは、例えばひらひらとゆっくり舞い落ちてくる動き、冷たい白さ、ごく軽い[b]脆いものを慎重に、優しく受け止めるイメージなどを共有することなのだ。右に述べたような「四〇度くらいの熱で、ヴィブラートを思い切りかけて」とか「いきなり握手するのではなく、まず相手の産毛に触れてから肌に到達する感じで」といった指揮者の指示もまた、典型的な「わざ言語」である。

（岡田暁生『音楽の聴き方――聴く型と趣味を語る言葉』による）

（注）
1 フリッチャイ――フェレンツ・フリッチャイ（一九一四～一九六三）。ハンガリー出身の指揮者。
2 ハンスリック――エドゥアルト・ハンスリック（一八二五～一九〇四）。オーストリアの音楽批評家。主著は『音楽美論』。
3 モメント――モーメント。物理学の用語だが、ここでは「運動の性質ないし傾向」というほどの意味で用いられている。
4 生田久美子――現代日本の教育学者。

問

(A) ――線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。（ただし、楷書（かいしょ）で記すこと）

(B) ――線部(a)・(b)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C) ――線部(1)について。この言葉の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 きめ細かく　2 具体的で　3 辛辣で　4 簡明で　5 堅苦しくなく

(D) ――線部(2)について。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 観念的な用語でしか理解できない音楽の思想的特性
2 楽譜に表記されたかぎりでの楽曲の形式や音の組織
3 型にはまっていて身体的実感の伴わない演奏の仕方
4 詩的隠喩によって漠然と表現された楽曲のイメージ
5 歴史の変動や文化の多様性と無関係な音楽の普遍性

(E) ――線部(3)について。文末を「ように思える」と結んでいるが、筆者はハンスリックの記述をどのように

捉えているのか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　ハンスリックは、音楽が何かを表現することを断固として認めないふりをしながら、あえて自己矛盾するような修辞を用いることで、実は音楽の表現機能を擁護している。

2　ハンスリックは、音楽が感情や情景を表現することは絶対にないという極端な逆説を弄することで、音楽の表現の可能性をめぐる議論に重大な問題提起をしようとした。

3　ハンスリックは、音楽が何かを表現するという考えをしりぞけようとして、そこにこそ音楽の喚起力が潜んでいる運動的特性の存在を逆に強調することになった。

4　ハンスリックは、音楽は音楽であってそれ以外のものを表現することは絶対にないと主張することで、かえって聴き手の側の自由な連想や解釈を許容してしまっている。

5　ハンスリックは、音楽は言葉のような直接の指示機能を持たないと主張する一方で、音楽が比喩的連想をかきたてるような別種の言語的機能を持つことを論証している。

(F)　――――線部(4)について。その理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　スメタナの曲は「猟犬の歓喜」という感情を表現したのではなく、猟犬の躍動を模倣したものだから。

2　「猟犬の歓喜」は、スメタナの曲を聴いた人の身体に生じた運動感覚を表現しようとした比喩だから。

3　「猟犬の歓喜」は、曲に内在する作曲者自身の運動感覚に対して聴衆を共感させようとした比喩だから。

4　「猟犬の歓喜」は、スメタナの曲の潜在的な特徴の一つを演奏者に実感させようとした比喩だから。

5　スメタナの曲が「猟犬の歓喜」を表現するというのは不正確で、演奏者が表現すると言うべきだから。

(G)　空欄 [　　] にはどのような言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1　動作　　2　表現　　3　喚起　　4　模倣　　5　共振

(H)　左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ　音楽家たちには、音楽は思想や哲学や宗教などの他の文化の領域とは関係ないと考えたがる傾向がある。

ロ　指揮者たちがリハーサルで用いる語彙には、「音楽を語る言葉」としてはありふれたものが少なくない。

ハ　音楽を生きたものとして経験するには、比喩表現によって聴衆同士が身体感覚を共有することが重要だ。

ニ　「わざ言語」は形を継承するためではなく、演者が自分の感覚を独創的に表現するために役立つ。

ホ　指揮者の比喩は、曲の特性にもとづいて演奏者たちの感情や感覚や動作を互いに呼応させる作用を持つ。

二　左の文章を読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

時間について考えてみたい。

時間とは時計で計るもの、万物に共通なものだと、私たちは考えている。しかしここでは、ちょっと違った見方をしてみたい。そうすると、ビジネスにも違った見方が開けてくるのではないかと思うからである。

心臓が一回打つのにかかる時間を、いろいろな動物で計って比べてみよう。心臓はドキン、ドキンとかなり規則正しく打っており、われわれの場合には一回のドキンは約一秒である。ところが、ハツカネズミのように小さなものでは一回に〇・一秒しかかからない。一方、大きなゾウでは三秒もかかる。体が大きいほど心臓はゆっくり打ち、拍動の時間が長くなる。哺乳類の心拍の時間は、体重の四分の一乗に比例することが分かっている。

時間は体重に正比例して増えるわけではない。四分の一乗であるから、体重が十倍になれば時間は約二倍長くなり、体重がさらに十倍になれば、時間はまたほぼ二倍長くなるという関係である。この関係は心臓以外にも、非常に多くのケースで成り立つ。腸がじわっと蠕動（ぜんどう）する時間や、血液が体内を一巡する時間など、みな四分の一乗におおよそ比例する。

一生に関わる時間もそうだ。(イ)セイジュウの大きさに達する時間、哺乳類の赤ん坊が母親の胎内にいる時間等々。寿命という「時間」についてもほぼ成り立ち、大きな動物ほど寿命は長い。

このように見てくると「動物の時間は体重の四分の一乗に比例する」と言っていいように思われる。動物の大きさが違うと、時間までさまざまに違ってくるのである。

四分の一乗という数字は、時間にだけ登場するわけではない。いろいろな大きさの動物がどのくらいエネルギーを使うかを測り、体重あたりにして比較すると、エネルギー消費量は体重の四分の一乗に反比例するという関係が得られる。大きい動物ほど、体の割にはエネルギーを使わないのである。同じ四分の一乗だが、時間が正比例でエネルギーが反比例。だから結局、時間とエネルギー消費量とは、互いに反比例の関係になる。

言い方を換えれば「時間の速度がエネルギー消費量に比例する」のである（「1／時間」は時間の進む速度とみなせるから）。動物においては、エネルギーを使えば使うほど、時間が速く進むことになる。ネズミのように小さな動物では、なぜかたくさんエネルギーを使い、時間が速い。ゾウでは時間はゆっくりと進む。

エネルギーをどれだけ使うかとは、どれだけ仕事をするかということでもある。時計で計った同じ時間のあいだに、せかせかとたくさん仕事をする方が、(1)生きるペースが速いと言えるだろう。このペースを時間の速度と考えれば、時間をエネルギー消費量で表すことができる。動物の時間とは、まさにこのような時間なのである。

こうした時間の考え方は、人間の社会生活にも適用できると思う。

新聞をめくって、大きく目をひく広告の代表は、車、飛行機、コンピュータ、携帯電話。ものごとを早く処理するものばかりである。早く移動し、早く計算し、早く情報を伝える。これらの機器やシステムにより、現代人の暮らしは、確実にペースが加速された。

もちろんこういう機器・システム類は、作るにせよ動かすにせよ、莫大なエネルギーを使う。われわれ現代人は、エネルギーを使って時間の速度を速めていると言っていい。

社会生活においても、時間はエネルギー消費量によって変わり、エネルギーを使えば使うほど時間が速くなるのは確かだろう。もちろん、エネルギー消費量と時間の速度が、厳密に比例関係になるかどうか分からない。しかし一応、動物の例にならって、人間の社会生活のペースをエネルギー消費量で測り、これを時間の目安とするのは、実用に足る考え方ではないだろうか。以上のような時間の見方でビジネスを眺めてみると、ビジネスとは時間を操作するものとして見えてくるのである。

一所懸命働くとはエネルギーを注ぎ込むこと。そうすると時間が速くなり、たくさんのものを作ったり、他の企業を出し抜いたりでき、その結果、金がもうかる。つまりエネルギーを使って時間を速めて金を得ているのがビジネスだと見ることができるだろう。

ビジネスはｂｕｓｙ＋ｎｅｓｓ、忙しいこと。忙しいとは［　　］ことである。「エネルギー→時間→金」と

いう変換を行うものがビジネス。変換の後半部分を言い表したのが「時は金なり」である。

このように、(2)時間を操作することがビジネスだと捉えれば、時間を主役にした、今までとは違った戦略の立て方ができるのではないだろうか。消費という行為も、現代においては、金とエネルギーと時間の変換とみなせると私は思う。今や車の費用や携帯の代金が食費を超すなどという話を聞くご時世。これはエネルギーを介して、結局は時間を買い取っている事態だと言っていい。

今の長寿も同様に理解できる。高度な医療は大量のエネルギーを使ってはじめて可能なのだし、もし空調がなければ、冬を越せるお年寄りの数は減るに違いない。長寿とは、エネルギーを介して時間を買う消費活動の一種とみなせると思う。もちろんこれは(3)顰蹙をかう言い方なのだが、消費活動だからこそ、大きなビジネスチャンスが生まれてきているわけだ。このように考えてみると、生産であれ消費であれ、現代においては、時間の要素を十分に考慮することなしには、ものごとの正しい理解や対処ができないのではないだろうか。

車であれコンピュータであれ、じつに便利なものである。だが、この便利さは手放しで喜べるものではない。大量にエネルギーを使うものだから、資源のコカツや地球温暖化をはじめとする環境問題という負の部分を伴っている。

これとは(4)別の環境問題があることをここでは指摘しておきたい。

私たち日本人はヒトという動物が生きていくのに必要な量（つまり食物として摂取するエネルギー量）の、約四十倍ものエネルギーを消費している。もしも時間がエネルギー消費量に比例して速くなるものとすれば、車も電気もなかった頃に比べ、今や生活の時間は四十倍も速くなったことになるだろう。

ところが体の時間は変わっていない。心臓は昔ながらのペースで打っている。体は変わっていないのに、生活のペースがどんどん早くなってしまったわけだ。こんなに速くなった生活のペースに、はたして体が無理なくついていけるものだろうか？　体の時間と社会の時間との間に、非常に大きなギャップが生じているのが現代なのである。ものが豊かになり、これほどまでに便利になった。にもかかわらず、今一つ幸せ度が上がらず、ストレス

がかかるし疲れるなあと感じてしまう。その原因は、生活の時間と体の時間との間の、大いなるギャップに主たる原因があると私は思っている。

私たちは時間の中で生きており、時間は重要な環境要因であるのだが、そのように捉えられることは少ない。時間は時計で計るもので、変わりようがなく、あたかも公害発生前の水や空気のように、大切だけれどもとりたてて考慮すべきものとは考えられていないからだろう。しかしここで述べてきたような時間の見方をすれば、時間環境が昔とは大きく変わっているわけで、はたして今の時間環境が、ヒトという動物が幸せと感じて生きていけるものかどうか、大いに問題にできるところだろう。これからの製品やサービスは、単純に早さや便利さだけを売り物にするのではなく、快適な速さとはどのあたりなのかを、しっかりと見極めたものにしなければならないと私は思う。

（本川達雄『世界平和はナマコとともに』による）

問

(A) ═══線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。（ただし、楷書（かいしょ）で記すこと）

(B) ═══線部(1)について。これはどのような意味か。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 寿命が長い
2 摂取するエネルギー量が多い
3 単位時間あたりのエネルギー消費量が多い
4 体重あたりのエネルギー消費量が多い
5 心臓の拍動が速い

(C) 空欄 □ にはどのような表現を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 金をできるだけ多く儲ける
2 時間の価値を十分に考慮する
3 生活時間と体感時間のギャップを埋める
4 生活のペースを乱す
5 時間を速める

(D) ――線部(2)について。左記各項のうち、その具体例として、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ コンピュータを用いてはやく計算する
ロ 昼食を食べながら勉強する
ハ 高度な医療を受けて長寿を達成する
ニ 自動車を運転してはやく移動する
ホ 職場に遅くまで残ってより多くの仕事をする

(E) ――線部(3)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 明らかに間違った言動をして他人から叱責される
2 下品な言動をして周囲の人から失笑される
3 不公平な言動をして仲間から受け入れられなくなる
4 不道徳な言動をして他人から嫌われる
5 良識に反する言動をして人からさげすまれる

(F) ――線部(4)について。「別の環境問題」とは何か。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中か

ら選び、番号で答えよ。

1　体の時間は変わっていないのに、大量の無駄なエネルギーを放出していること

2　体の時間と社会の時間との間の大きなギャップが正しく理解されていないこと

3　エネルギーを介して時間を買うことに夢中になることで不幸せになっていること

4　生活の時間が、ヒトにとって幸せを感じる快適な速度ではなくなりつつあること

5　はやさや便利さを追求して、製品やサービスを過剰に作り出していること

(G)　左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ　これから製品やサービスを生み出す際には、時間の短縮による便利さの追求を第一に考えるべきである。

ロ　哺乳類の「寿命」と「血液が体内を一巡する時間」は反比例する関係にある。

ハ　日本人は便利で豊かな生活をするために、時間を買って過度にエネルギーを消費しながらも、幸せを実感できていない。

ニ　時間は重要な環境要因であり、その有効活用のためにビジネスのさらなる進展が望ましい。

ホ　動物の「腸がじわっと蠕動する時間」は「体重」の四分の一乗におおよそ比例する関係にある。

三　左の文章を読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

蚊、蚊、帳中の蚊、汝を焼くに辞をもてす。汝この辞を聞く時は、わが手に死すともみづからたれりとせよ。それ沢雉は樊中にやしなはれむことを願はずと、彼は［a］をとる。これは［b］をもとめて、人の肌にせまる。かれを愛せむや。これをにくまむや。

きぎすは草にかくれて、草の為に焼かる。汝は帳に入つて、帳の為に焼かる。(1)あはれなるかた、いづれとかせんや。

蟀・促織の火に入るは、恋ゆゑときけばわりなしや。(2)雨に濡れ露にそぼちて、さそはれし風だにもつらし。げに玉の緒の(3)絶えなむ事もしらず、いく偽の夜や頼み来し。汝が焼かるる事、(4)何を情とせむ。(5)義経の逆落しは暫時さしおく。須山・小宮山が夜討ちは、かくれて謀をなすといへども、天下の為にして、(6)名おのづからしたがふ。また汝といはむや。

虞舜は頑父をさけ、日本武尊は夷賊をのがれ給ふ。ともに天にして汝といふべきにあらず。大盗あに枢戸を穿たむや。汝がふるまふを見るに、帳をたるる時は、その翩々の間をうかがひ、垂れをはつて、縦横の透間をたづね、すべて小破の所をもとめ、人のしりへにつきて入らむとはかる。(7)嗚呼跖蹻が徒にはあらじ。

すべて汝がおこなふ処、猛き事もなく、たのしむ事もなし。あはれなるかたにも、(8)やさしきかたにもあらず。ただにくむべきものの甚だしきなり。

蚊、蚊、帳中の蚊、汝を焼くに辞をもてす。汝このことばを聞く時は、(9)我が手に死すともみづからたれりとせよ。

① 子や啼かむその子の母も蚊の喰はむ

（『風俗文選』による）

（注）
1　沢雉――沢のなかに住む雉。
2　樊中――籠の中。
3　きぎす――雉の古称。
4　促織――きりぎりすの異名。
5　義経の逆落し――源平の合戦で源義経、範頼が、摂津の福原に本営を置いていた平氏を攻めた折、義経の鵯越の奇襲により平氏を屋島に敗走させた。
6　須山・小宮山が夜討ち――元弘の乱の笠置山の戦い。備中国の陶山義高と小宮山次郎とが一族を引き連れて京都笠置の城中に忍び込み、火をかけて勝利の機会をつくった。
7　虞舜――中国古代の帝王舜のこと。父は性質が頑愚で舜を憎んだが、舜はその父によく仕えたという。
8　枢戸――重要な扉。
9　跖蹻――昔の大盗賊、盗跖と荘蹻のこと。

問

(A)　空欄 a ・ b にはそれぞれどのような言葉を補ったらよいか。その組み合わせとして最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　a　自　b　他　　2　a　生　b　死　　3　a　心　b　食
4　a　楽　b　情　　5　a　実　b　虚

(B)　――線部(1)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　気の毒なのは、きぎすと蚊のどちらであるか。
2　情趣があるのは、草の中と帳の中のどちらであるか。
3　死に場所として好ましいのは、草の中と帳の中のどちらであるか。
4　趣深いのは、きぎすと蚊のどちらとは決められない。
5　かわいそうなのは、きぎすと蚊のどちらとは決められない。

(C) ――線部(2)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 悪意がない　2 情緒がない　3 仕方がない
4 根拠がない　5 利益がない

(D) ――線部(3)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 宝　2 縁　3 恋　4 光　5 命

(E) ――線部(4)の文法上の説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 「絶え」は動詞、「なむ」は強意の係助詞
2 「絶え」は動詞、「なむ」は願望の終助詞
3 「絶え」は動詞、「な」は断定の助動詞、「む」は推量の助動詞
4 「絶え」は動詞、「な」は完了の助動詞、「む」は婉曲の助動詞
5 「絶え」は動詞、「な」は完了の助動詞、「む」は意志の助動詞

(F) ――線部(5)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 どんな同情の余地があろう　2 どんな事情があるのだろう
3 どんな苦情を言えるのだろう　4 どんな恋情をみればよいのだろう
5 どんな情趣を感じているのだろう

(G) ――線部(6)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 名将がわれ先に従った　2 名声も自然と高くなった
3 家名が不本意に広がった　4 名ある者もみずから降伏した
5 名前がひそかにささやかれた

(H) ――線部(7)について。筆者がこのように言うのはなぜか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1　大盗賊は大胆に盗みを働くが、蚊は蚊帳の隙間や破れをこそこそと卑屈に狙うから。
2　大盗賊は扉ごと壊して盗みを働くが、蚊は蚊帳の隙間や破れを巧みに探して侵入するから。
3　大盗賊は盗みを働くときは根こそぎ金品を奪うが、蚊は人に気付かれない程度の血を吸うから。
4　大盗賊は天の助けがあるので人の目を気にしないが、蚊は人に見つかるのを恐れて行動するから。
5　大盗賊は盗みという罪を犯すが、蚊は人にとって迷惑ではあっても道に外れた行為はしないから。

(I)　――線部(8)の意味を四字以内で記せ。（ただし、句読点は含まない）

(J)　――線部(9)について。筆者がこのように言うのはなぜか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1　蚊は、もののあわれを理解しても生を楽しんでいないから。
2　蚊は、人を感心させるような性質を持ち合わせていないから。
3　蚊は、みずからを犠牲にしてまで世のためになる行為をしないから。
4　蚊は、人をあわれんだり助けたりする存在に生まれ変わるべきだから。
5　蚊は、他の優れた存在と見まちがえるような紛らわしい行為をするから。

(K)　文末の①の句は、「憶良らは今は罷らむ子泣くらむそれその母も我を待つらむそ」（万葉集・山上憶良）による。これをふまえ、①の句に対する評として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　妻子が待つみずからの家への想いを詠んだ憶良の歌をふまえ、憶良の歌の主意をずらし、子や妻が泣くのは蚊が喰うせいなのだと言って蚊を焼く理由を強引に正当化し、笑いを誘っている。
2　子どもが泣いているのは父の帰りが遅いからだが、その母が泣くのは蚊に喰われたからだと言って、子どもと母の泣く理由を対比的に示すことにより、憶良の歌との違いを鮮明にしたところに新しみがある。
3　妻子が父の帰りを待ちわびて泣いていると詠んだ憶良の歌に対し、今の子どもやその母は父を待つのではなく蚊に喰われて泣くのだと諧謔的に詠むことで、昔と今の家族像の違いを浮き彫りにしている。

4　妻子への愛情を詠んだ憶良の歌をふまえることで、人を喰う憎らしい奴とはいえその蚊にもやはり妻子がいるのだろうかと心配もする、憎しみと同情とが入り交じった作者の複雑な心境が重層的に表現されている。

5　妻子への深い想いを詠んだ憶良の歌の心を受け継ぎ、そういえば自分の子どもやその母は今頃蚊に喰われて泣いているかもしれないと想像し、家族への愛情を改めて思い起こさせてくれた蚊に感謝している。

【以下余白】